

教材に即した国語科の指導

1. 近代短歌

酒 井 為 久

1. 読解と鑑賞

「現代国語」の授業で、詩歌教材を取り扱うとき、その取り扱いについての考え方は、それぞれに独自のものがあるわけだが、それらを大別して、要約すれば次のようになるであろう。わかりやすくするため、使用する用語は読解と鑑賞だけとし、読解の中に解釈・内容の理解・通読・受容活動などの意味を包含させ、鑑賞の中に批評・味読・表出活動などの意味を包含してある。

その一つは、読解から鑑賞へと段階を追って授業が進められ、生徒の主体的な鑑賞活動によって終わるといふ、一連の過程を想定する行き方である。これは、どの教材にあっても適用できるものであるが、詩歌教材はその過程を最も完全な形態で実施することができ、それゆえ最後の鑑賞の段階にまで行き着かない授業は不十分で、徹底しない授業であるとする考え方である。教材の読みの浅いところから、順次に、読みを深めていく手順をふむのが当然であるという、正統派の授業観といえよう。

これと対称的な考え方は、読解と鑑賞とは、本来次元の異なるものであるということから出発する。だから、教材には、読解だけでよいもの、読解から高次元の鑑賞へと進むべきもの、最初から鑑賞に入ってもよいものというように、それぞれの持っている目的・目標が異なるという考え方である。このなかに、教材そのものの性質からその目的・目標が固定されているという見方と、他に、生徒の状況や授業のあり方と関連させ、教材の目的・目標が変化していくという見方があるが、ともに教材の持つ目的・目標を追求するのが授業であるとするところが共通している。

この行き方においても、詩歌教材の持つ・目標に沿った取り扱いは、読解から鑑賞へと進むことであるが読解が生徒にとって主として受動的な学習活動である点と、反対に、鑑賞が主として能動的な学習活動である点を区別して、次元が異なるという語を用いるように、読解から鑑賞へを一連の過程とは考えていない。そこで、授業の効率や進度を考慮して、詩歌教材にあっても、読解だけの授業や最初から鑑賞を行なう授業も可能だとする行き方をとるのである。

いま、対称的な行き方だけを記したが、このいずれをとるにせよ、よりよい鑑賞の基盤に読解を置くこと

に変わりがない。読解を充実すれば、それに付随し、触発され、よりよい鑑賞を導くことができるわけである。授業時の取り扱いに、読解から鑑賞への直接のつながりを想定するにせよ、また、しないにしろ、より深い読解があってはじめてよい鑑賞が成り立つという観点から、本稿は詩歌教材の中の短歌（近代短歌）の読解の指導について考察することにした。

2. 句切れについて

短歌を読解していく上の、最も大切な要点は「句切れ」の把握にあるということが出来る。経験的にもそういえるが、近代の代表歌人の歌を調べると、十首中六、七首の割合で句切れのある歌がでてくるのにひきかえ、高校生の作歌には十首中に二、三首しか句切れのある歌がないことから、そういえると思う。即ち、近代に生きる歌人がその複雑な心情を詠むとき、三十一文字の中の句切れを生かして、微妙な心情のあやを伝えているのに、一方で、未熟な高校生の作歌に句切れの技術が生かされきっていない様相として認めることができるように思う。

さらに、文法面からいって、文意を的確にとらえようとする場合、句点から句点までの「文」を文意の最小単位のみとまりとして理解していることはいうまでもない。が、短歌の場合、句読点を使用しないという慣習があるので、短歌の中の「文」を意識せずに読み過ごし、それが原因で読解が不十分になっている事例が多いことから、句切れを把握することの重要性を理解することができよう。

そこで、句切れとは何かという、国語学的・国語史的な説明も必要になってくるが、研究してまとめるまでに至っていないので、ここでは実際の指導の場における現象をとらえて説明する行き方になってしまうことをおことわりしておきたい。それは、五・七・五・七・七の切れ目で、文法的に「文」が終わり、したがって意味内容の切れ目でもあって、句点をうてるころということになる。この程度の説明をし、これを実際の歌の上でたしかめさせる作業を繰り返し、その過程で、これに当てはまりにくい歌について注意を促す指導が普通行なわれているところであろう。

注意すべき歌の例として、第一に

山脈は丘と低まる北の果て雪解の地の黒くうるほふ

窪田章一郎

雲海の上にくれゆく山の空ただしづかにて飛ぶ鳥も
なし
岡山 巖

この二首を、三句切れとするか、句切れなしとするかということである。二首とも三句目を体言止めと解釈し、そこにある種の詠嘆をこめていると受け取ることでもできるし、主述関係や修飾被修飾関係で下の句へ連っていきと解釈することもできよう。高一の授業で調査したところ、「山脈は」を約8割のものが三句切れとし、「雲海の」は約9割のものが三句切れと受け取っていた。これは、後の「夕焼け空」の歌で述べる生徒の受け取り方の特色とも関係があるが、全くの誤答とするよりも、歌の内容を的確にとらえるのには、三句切れとした方がよいか句切れなしとした方がよいかで判断させるのが妥当で、語法上から句切れと断定しにくい例であろう。しかし、生徒にとっては読解しやすい種類の歌であるといえよう。

次に、読点のうてるところを句切れとするかどうかという問題である。読点の中には、句点に近いものから、意味のはっきりした切れ目でないところうつ句点まで、さまざまな程度のものである。それらを実際例でどう扱うかということである。

霜どけのうへに午前のひかり満ち鶏はみなひとみ鋭し
佐藤佐太郎

争ひのところわくとき部屋いでてくぬぎの下に落葉をぞ踏む
木俣 修

同じく調査では、「霜どけの」を約8割の生徒が三句切れとし、「争ひの」は約4割が三句切れ、約5割が句切れなしとしている。二首ともに、三句目に読点をうつことができるのだが、意味内容を加味して考えると「霜どけの」は三句目の読点で場面の転換が感ぜられ、連用中止法として三句切れとすることができるが、「争ひの」の三句目の読点は下の句へ接続していく感じが強い歌である。このように、読点のうてる場所とその意味の切れ目の程度とを個々に具体的に考えてみなければならぬ歌がある。

第三に、興味深い調査結果として、生徒の独自でとらわれない歌の受け取り方とそれに関連した句切れの考え方があった。

夕焼け空焦げきはまれる下にしてこほらんとする湖の静けさ
島木 赤彦

山道に昨夜の雨の流したる松の落ち葉はかたよりにけり
同上

「夕焼け空」の歌は、一句切れとするもの約3割、一句切れと四句切れ約1割、二句切れ約2割、三句切れ約2割、句切れなし約2割という答えであった。「山道に」の歌は、一句切れ約2割、二句切れ約2割、句切れなしとするもの約6割という結果であった。ここで注意しておくことは、二首ともに、一句切

れとするものがあることである。これは、最初の部分で場面や状況を設定したり、一首の題目とか見出しとくに相当することを表現したり、ときに主語（詞的なもの）をおき、それに続く部分でそれらを具体化したり、説明や陳述、述語（辞的なもの）などをおくと受け取った結果であるものが多かった。もちろん、文語では主語に助詞をつけないことがあるという知識の欠如や、短歌における流動的な表現に親しみがうすいことなど誤答の原因も分析できたが、なお、そういう生徒の歌の受け取りの仕方に意義を見出すこともできるように思われる。句切れの学習とは別の、鑑賞の領域に近い、あるいは、創作の領域にあたる問題があるように思われたのである。

3. 具体的な問題点

短歌の読解にあたって、最も肝要な句切れの具体的な問題点を個々についてまとめてみよう。

天地はすべて雨なりむらさきの花びらたれてかきつばた咲く
窪田 空穂

この歌は二句切れであると約10割のものが答えている。主述関係が明らかな上に、句切れを境にして述べられている事柄の大小の違いがはっきりしているの、語法上「なり」が終止形であるという知識を抜きにして理解できる歌であろう。

木の花の散るにこずゑを見あげたりその花のにはほひかすかにするも

この歌の句切れの正答率も約10割であった。作者の日常的な動作と対象物の状態の説明とが句切れを境にしてははっきり区分されていて、明確な内容の歌といえることができる。

牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ
木下 利玄

この歌の正答率も約10割であった。主述関係がはっきりしていて、叙述が順を追っていきなりわかりやすいのでそうなのであろう。

正答率の高い歌は、主述関係が整い、詠まれている事物が日常だれもが見聞するもので、客観的叙述の歌に多かった。次に、句切れについて、いろいろな答のでた歌を記そうと思う。

電燈のともりそめたる図書館の日暮れより夜へ移るひそけさ
窪田章一郎

この歌は三句切れ約5割、句切れなし約5割と答えが二つに分れている。三句切れとしたものは、上の句が歌全体の状況設定の部分で、下の句はその場の息づかいを具体化していると考えたものや、「図書館の」が文脈の上で続いていくところをはっきりさせえないというものなどであった。

弟の臨終のあはれ伝へ得る一人の兵もつひに還らず
窪田章一郎

この歌も、三句切れ約5割、句切れなし約5割と答えがあったものである。「得る」が連体形であるという知識がなくとも、文脈のたどり方が確かであれば正答できる歌と思われる。既習の口語文法の応用が十分でないものが見受けられた。

弟は働きつかれねたればか布団かきのけねごとをいへり
土屋 文明

この歌は三句切れ約6割、句切れなし約4割であって、文法面の知識の欠如と意味内容面の理解の程度がからんだ答えとなってきた。以下に、同様な傾向の二首を記そう。

押しよする夜の寒波に凍む土のいづべにかありて沈丁にほふ
木俣 修

これは三句切れ約3割、句切れなし約7割であった。

秋分の日の電車にて床にさす光もともに運ばれて行く
佐藤佐太郎

これは二句切れ約4割、句切れなし約6割であった。

以上のように、句切れの答えが二つに分れる傾向のある歌は、比較的内容は明確でわかりやすいが、句切れをはっきりさせるため利用する初歩的な文法知識を必要とするものや、生徒独自の判断で句切れを入れて考えやすいものなどに多かった。

句切れの答えが三つ、あるいはそれ以上に分れる傾向のある歌について、次にまとめてみたい。

やはらかに柳あをめる北上の岸べ目に見ゆ泣けとごとくに
石川 啄木

この歌は、一句切れ約1割、二句切れ約3割、三句切れ約1割、四句切れ約5割という答えであった。屈折した表現であるうえに、一句目の連用修飾の理解、二句目が終止形か連体形かということ、上の句で情景設定をしていると見る受け取り方などが原因で、まちまちな答えになってきている。

鳴く蟬を手握りもちてその頭をりをり見つつ童はせ来る
窪田 空穂

この歌は、一句切れ約1割、二句切れ約3割、三句切れ約1割、四句切れ約2割、句切れなし約3割という答えであった。その原因は、すでに考察してきたものの組み合わせであり、意味内容のまりまりをとらえるときに、そのまとまりの間に、文法上・語法上の切れ目があるかどうかの吟味が伴っていない点にあると考えられた。この点の指導はとくに留意しなくてはならないところである。

同様の例を続けよう。

あますなく小草は枯れて風に鳴るかなたに小きき山の中学
木俣 修

この歌は、一句切れ約1割、二句切れ約2割、三句切れ約6割、句切れなし約1割であった。三句目の

「鳴る」を終止形と見て、近景と遠景の対称的な絵としてとらえやすい歌だが、一句目が連用修飾であるとか、二句目が接続助詞であるとかという知識があれば、なおの確に理解できるはずである。

今日もかも春日に歩む父を見る南遠く子を戦死せしめたり
土屋 文明

この歌を、一句と三句切れと正答したものは約1割で、三句切れとだけしたもの約7割、句切れなし約2割であった。「かも」を使用した表現のむずかしさもあるが、内容の吟味不足を感じさせられるもする結果であった。

碓氷嶺の南おもてとなりけりくだりつつ思ふ春のふかきを
北原 白秋

この歌を、三句と四句切れと正答したものは約2割で、三句切れとだけしたもの約7割、四句切れとだけしたもの約1割であった。わかりやすい内容ではあるが、倒置された表現に気づくものが少ないという内容把握のあいまいさが原因となって、誤答が多くなったように思う。このように、二つの句切れをもつ歌では、意味内容に対する吟味不足が原因となって、句切れの的確な把握が十分でない例をうかがうことができた。

なお、次のような例をも合せて考慮する必要があることを付け加えておこう。

わが立てる岩を残して凝れる雲白く平らけくはるけくも空に
窪田 空穂

この歌の五句目の途中で、句切れに相当するものがあることを、ほとんどの生徒が見過ごしている点である。

以上に述べてきたことを総括すると、国語学でいうところの文章論の、最も単純なひな型ともいえる事柄について、短歌の句切れを指導しながら考察しているということができよう。体系的な文章論の成立していない現在、句切れの問題を短歌という文芸形式の中で考えることの困難さを感じながらも、このことがやはり、短歌読解とその上に成り立つ鑑賞にとって、最も大切なことであるということあらためて感じた。

4. 教材の実態と指導

「現代国語」の全教科書に、どのような短歌教材が載せられているかという調査資料として、「高等学校国語科指導資料・教材と指導法・文部省・41年刊」がある。その資料を参照し、短歌教材とその句切れを一覧表にしてみた。

(歌人名)	(掲載数)	(句切れ) <延べ数>				
		一	二	三	四	なし
落合直文	5	1		2	2	

与謝野鉄幹	1	1	1		
与謝野晶子	25	4	2	6	5 8
窪田空穂	11	3	1	3	5
石川啄木	31	1	6	7	4 14
北原白秋	30	2	2	9	6 14
吉井勇	1				1
金子薫園	1				1
土岐善麿	1		1		
尾上柴舟	1				1
若山牧水	23	1	2	4	6 11
岡山巖	5	1	2		3
前田夕暮	9	1		4	2 3
木俣修	6		2		4
窪田章一郎	5		2		3
佐々木信綱	6		2		4
木下利玄	22		3	4	6 9
川田順	2		1		1
正岡子規	23	2	1		1 19
岡麓	2				2
伊藤左千夫	21		1	2	2 16
長塚節	24		3	1	4 16
島木赤彦	27	1	5	7	5 10
斎藤茂吉	41	2	5	13	7 19
土屋文明	15	1		7	4 6
中村憲吉	9		2	3	4
古泉千樞	3	1			2
鹿兒島寿蔵	3				2 1
佐藤佐太郎	5		2	1	2
釈迢空	21		2	8	2 10
会津八一	7				7

表全体から見て、近代短歌を代表する歌人がほぼすべて出ており、代表的な歌人から順に多くの歌が採用されており、句切れの様態もそれぞれに個性的な趣が感ぜられて、近代短歌の全貌をうまくとらえているといえる。しかし、これは15種45冊の教科書をまとめたため、教科書1種平均にすれば25首～38首が掲載されるに過ぎず、当然のことだが、掲載基準のあり方が問題となつてこよう。ところが、短歌掲載上の工夫が

明確にされていないような教科書もあって、教材選定の吟味不足を感じることもある。

教材選定基準として、短歌史上注目されたもので、その歌人を最もよく代表する歌集だけから作品を選定し、解説文において、歌人論や近代短歌史を扱うようにして、掲載した歌集と歌集の間を埋める工夫をしたらどうかと考えている。歌集に凝集された近代歌人の抒情の一部を通じて、近代短歌の真髓に触れ、解説文にあつては、日本の伝統的なうたの流れをさかのぼることもできるような教材選定は不可能だろうか、ややもすれば日常経験的な今日的な短歌教材と解説文が多くなっている実態から、考えている次第である。

その際、たとえば、釈迢空の「海やまのあひだ」にあつて、769首中、句切れのあるもの461首約61%、句切れなし308首約39%という数字を参考にすると、先の一覧表中の釈迢空の歌の中の句切れのあるもの11首、句切れなし10首は、句切れによって歌の声調が伝えられる意味で考慮不足の感がある。短歌表現技法上、また、短歌読解上肝要な句切れを、教材として掲載する歌集の句切れの比率にしたがって考えるという配慮も可能となってくるわけで、一覧表の句切れの項目については、その面から比較対照してみようと考えている。

5. ねらい

中学、高校の国語の授業の内容を分析し、集約していくと、同種の教材を扱うときの、共通した指導事項がいくつか見出されるが、その中から、その種の教材が独自にもっている学習内容で、生徒の学習のカギとなるような、一般的な応用性をもつ事項をまとめることができる。その事項を指導・学習することにより、その種の教材がより深く理解でき、主体的に学習しようとする意欲をもたすこともできる事柄を、それぞれの教材に即して考え、実践の場で確かめていく、第一歩として「近代短歌」をとりあげたのである。だから、多種の教材に共通する基礎的な学習事項は除外して考えているのであり、また、個々の教材研究は別のところで実施して、この稿には記載しなかつたのである。